

ミラー & マランタ

ミラー&マランタの建築 フェデリコ・ランファ

参照 | 本誌 pp.3-43

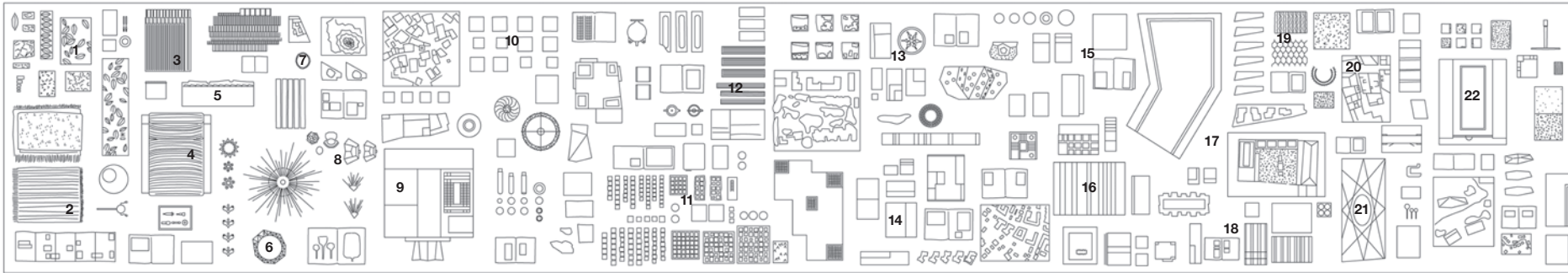
1994年にバーゼルで設立されたミラー&マランタ事務所は、スイスの「新しい」建築の主な担い手に数えられる。「新しい」建築とはすなわち、20世紀後半にチューリヒ工科大学で学び、アルド・ロッシの個性に影響を受け、「類推的建築」^{アナロジー}と命名された彼の教えの解釈者となった建築家たちのことだ。チューリヒではファビオ・ラインハルトやミロスラフ・ジークといった教師陣が、スイスのモダニズム建築の直線的な軌跡に一大転換を引き起こした。彼らはスイス近代建築に他の要素を混淆させて発展させつつも、その技術的本質を失うことはなかった。一世代前の人たち——ヘルツォーク&ドムーロン、ディーナー&ディーナー、マイリ&ペーターといった現在も活発に活動する建築家デュオ——がすでに経験したように、ロッシの触媒としての影響は、モダニズム正統主義を越えて一步前進するうえで決定的だった。クイントゥス・ミラーとパオラ・マランタはチューリヒ工科大学を卒業後にバーゼルに事務所を開いた。この都市は建築家として設計のチャンスを得るうえで最も有利に思われたが、彼らの目には開明的な精神と文化シーンの多様性の点で特別な場所に映った。ミラー&マランタの建築は、多様な戦略と素材を使って特定の問題を解決する点でコンセプトチュアルに見える。彼らの建築は対話を通して生命を得て、探求によって力を運び、フォームを反復することなく場所とその文化の解釈を提示することによって立ち現れる。ミラー&マランタの作品は言葉から生まれ、物語を語り時代を表現する欲望を通して現れ、人間に奉仕する。この特別な感性によって、彼らはさまざまな——時に高い価値を持つ——歴史的建築の修改築に携わるチャンスを得てきた。一見して折衷主義



ミラー&マランタ作品展、メンドリジオ建築アカデミー、2017

的な彼らの姿勢は、地域の特性への深い敬意と、自然か人工かを問わず世界との調和への希求から生まれている。ミラー&マランタが慣れ親しんできた気分・調子の解釈は、楽器を調律する行為を表すこの語の音楽的語義と関係する。この意味で、適切なシュティムンク^{シュティムンク}の追求とは、事物と調和するよう振動させること、調和的な構成を探索することを意味する。一種の思考の循環性を通して、類推というアイデアは当初の美学的元型から離れて、むしろコンテクストを読み解く技術に変わる。後続の特集ページに載せたプロジェクトが証明するように、ある素材の振動あるいは建築タイポロジーの選択から、風景の強調あるいは空間に特定のクオリティから、調和が生まれる。クイントゥス・ミラーはこう書いている。「人間はその感覚を使って周囲の環境との関係に入る。自分の身の回り

- 1 Tomba, Aarau, 2008
- 2 Klanghaus, Toggenburg, 2010
- 3 Centro commerciale Erlenmatt, Basilea, 2008-2013
- 4 Presbiterio, Duomo di Arlesheim, 2007
- 5 Uffici Roche, Rotkreuz, 2007
- 6 Piazza dell' Abbazia, Einsiedeln, 2008
- 7 Golf Resort, Seefeld, 2009
- 8 Presbiterio, Duomo di Linz, 2015
- 9 p.12 / Hotel Waldhaus, Sils-Maria, 1995-2016
- 10 p.25 / Bagni di Samedan, 2006-2009
- 11 p.30 / Spa Hotel Waldhaus, Sils-Maria, 2014-2016
- 12 p.23 / Appartamenti Patumbah, Zurigo, 2005-2013
- 13 p.23 / Hammam Patumbah, Zurigo, 2005-2013
- 14 Residenza per anziani Spigarten, Zurigo, 2004-2006
- 15 p.20 / Appartamenti Schwarzpark, Basilea, 2001-2004
- 16 p.26 / Appartamenti Sempacherstrasse, Basilea, 2011-2015
- 17 Kunsthalle, Basilea, 2002-2012
- 18 Casa Baumgarten, Riehen, 2008
- 19 Appartamenti Baumgarten, Oberwil, 2011-2017
- 20 Marktgasse, Zurigo, 2008-2014
- 21 Municipio, Basilea, 2014-2016
- 22 Museo Augustinergasse, Basilea, 1999



同、展示計画

【エルンスト・バズラー・オフィス、2011-16】

所在地: Am Hamburger Bahnhof 4, 10557 Berlin, Germany

概要: 2011年の招待設計競技で優勝した本作は、シュプレー川運河の河岸に位置し、古いハンプルク中央駅から近い。現場打ちされた鉄筋コンクリートのファサードから完全さと堅固さの観念が伝わってくる。2017年に本作はコンクリート建築賞を受賞。

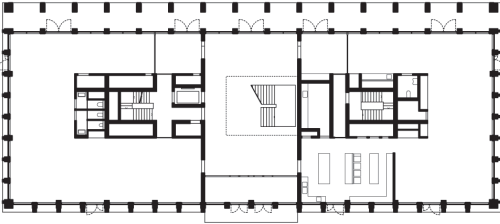
参照: 本誌 pp.28-29, 41



運河に面するファサード



階段室



1階平面図

【スバ・ホテル・ヴァルトハウス、2012-16】

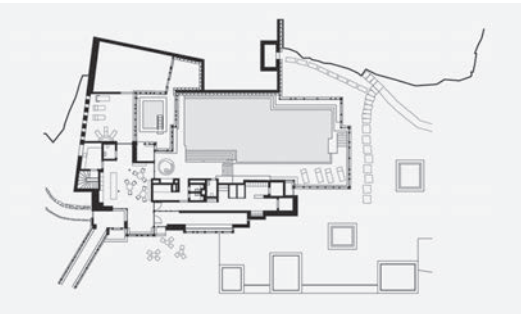
所在地: Via da Fex 3, 7514 Sils-Maria, Cantone dei Grigioni, Swiss

概要: 岩石に掘り込まれた自律した有機体が地表にわずかに姿を現す。大きな開口部によって木々の間にある建物を認識でき、その窓から自然光がプールと同じ高さにある下層階まで射し込む。

参照: 本誌 pp.30-31, 41



敷地下方から見る



1階平面図



階段室

【パロワーズ・タワー、2010-20】

所在地: Aeschengraben 21, 4051 Basel, Swiss

概要: パロワーズ・タワーが建つスイス鉄道駅に近い敷地は保険会社パロワーズの所有地で、ミラー&マランタが依頼を受けたマスタープランに含まれる。計画には、低層棟（ディーナー&ディーナーおよびヴァレリオ・オルジャーティが設計）の建設が予定されている。コンクリート製のプレファブ部材に覆われたタワーの構成は、スケールの曖昧さによって生かされている。この曖昧さは、比較的細いフレームと広いガラス面のプロポーションに起因する。現在工事中である。

参照: 本誌 pp.32, 42



全体計画



配置図

ジョアン・ルイス・カリーリョ・ダ・グラサ

「クルーズ船ターミナル」

設計=ジョアン・ルイス・カリーリョ・ダ・グラサ

都市芸術としての建築 マルコ・ムラッツァーニ

参照 | 本誌 pp.44-57

リスボンの新しいクルーズ船ターミナルは、ポルトガルの首都で過去数年間に実現されたものの中でおそらく最も期待が高かった作品であり、都市改変プロセスにおいて建築が「調整力」を発揮できる可能性の象徴的な証明と断言できる。このインフラストラクチャーは「大型客船」観光の急成長によって必要とされ、誕生した。事実上、ジョアン・ルイス・カリーリョ・ダ・グラサの設計案において、川と歴史的都市を結ぶ広大なエリアを再考するチャンスとなり、ターミナルとその周囲の公園を都市への新たな門に変えることになった。

2007年に始まる一連の経緯を辿り直すことが有益であろう。まず2007年にバイシャ・シャド再開発委員会が、観光客船ターミナルをアルカンタラ海港駅からより中心部に近いサンタ・アポロニア港湾エリアに移す決定をした。サンタ・アポロニアは主要な国際鉄道線とポルトガル高速鉄道線の駅と隣接している。ボンバル侯爵時代に整備されたバイシャ地区およびテレイロ・ド・パソの西と東に位



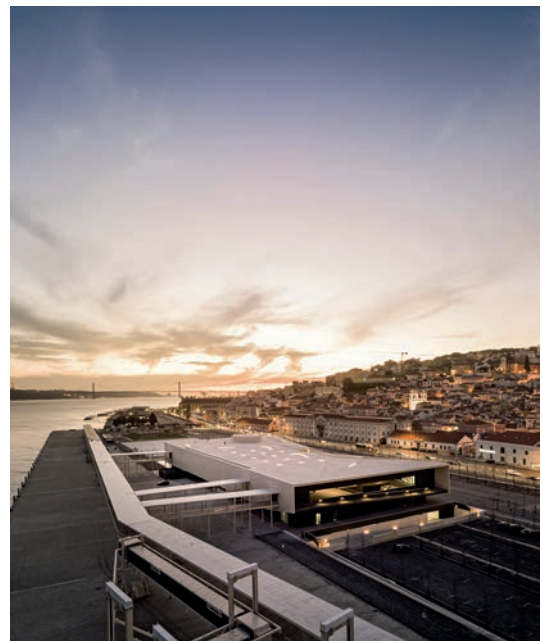
アルファマ地区の「展望台」より見る

置するタホ川沿岸地区を再編する計画——現在ほぼ完了——との相乗作用で、ターミナルの新しい位置は既存の埠頭を強化・拡張する大規模事業につながった。そこで大規模船舶を接岸させる新棧橋^{カイス}が実現された(長さ476m、幅55-16m)。最後に、使われなくなった船渠[ドック](ジャルディン・ド・タバコ^{ドカ}の埋め立てによって広い平地が生まれ、旅客ターミナルの建設地に充てられることになった。ターミナルの国際設計競技が2010年4月初頭にリスボン港湾局によって布告され、同年7月30日に終了した。36の応募案のなかから上位5位にノミネートされたのは、上から順にカリーリョ・ダ・グラサ・アルキテクトス、ゴンサ

ロ・ビルネ+マヌエル・アイレス・マテウス、ギリエルモ・バスケス・コンセグラ、ARXポルトガル、ザハ・ハデドである。ターミナル委託国際入札(ターミナル建設と35年間の運営権を想定)は2013年12月に完了した。エリア全体の工事は2014年1月、ターミナル本体は2016年にそれぞれ着工し、2017年9月に旅客ターミナルが開業した。設計競技について検証すると、審査委員会が第2等を贈ったのは、強固な都市的アイデンティティのイメージに特徴づけられた設計案だった。まさに要塞(拡張部分も)と呼ぶべきものは、屋根の遊び心あるデザインによって港の古い産業建築を呼び起こす。要塞は内部空間と外部空間に分節化され、屋



陸側より見る



川側より見る



エントランス・ロビー



通路



研究室

ゾーンと、樹木の間もしくは日除けの格子を通った直射日光に照らされたゾーンとの切り返しを通して、この場の高地ならではの気候変化にうまく対応している。建物のマッシヴな性質は、ミシュテカ地域に特徴的な日干煉瓦の建物によく似た色の、自己収縮性の特殊なコンクリートを建物全体に使うことによって得られた。建築は全体として非常に密度が濃くまとまりがあり、強い重力を受けているかのようだ。建築的・思想的な価値において完全であるとともに非常に重々しく、この重さはフォルムと分けるこ

とができないこと、また感情に生命を与える力とフォルムとを分けられないことも主張している。

作品：オアハカ州立歴史文書館

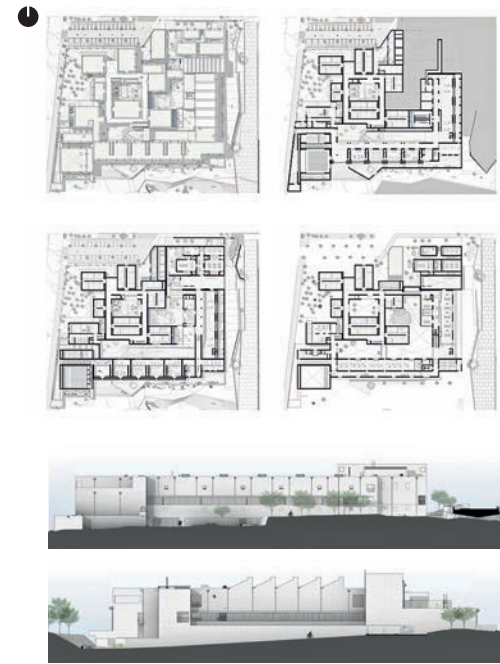
設計：メンダロ・アルキテクトス/イグナシオ・メンダロ・コルシーニ

協働者：Anabel Gómez García, Omar Peñaloza Mendoza,

Maribel González Apodaca, José Ignacio Montes

構造：PROESI S.C., Darío Vasconcelos M

設備：Abelino León García



配置図/平面図/立面図



断面図

供給：CEMEX, EUN Group, Schindler

照明：Noriega Iluminadores

招待アーティスト：Noriega Francisco Toledo

建築主：Fundación Alfredo Harp Helú Oaxaca,

Gobierno del estado de Oaxaca

規模：延床面積 11,815m² | スケジュール：竣工 2016年

所在地：La Ciudad de las Canteras, Mártires de Tacubaya,

Agencia Municipal Sta Maria Ixcotel,

71229 Santa Lucía del Camino, Oaxaca, Mexico

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2018 Amokko Mondadori Editore

©2018 Architects Studio Japan

スミルハン・ラディック

【ビオビオ州立劇場】

設計:スミルハン・ラディック

協働者:Eduardo Castillo, Gabriela Medrano

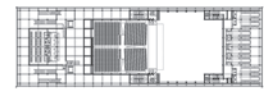
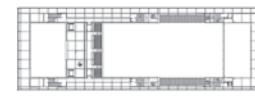
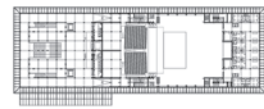
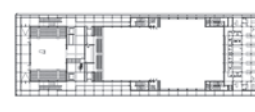
構造:B.y B. Ingeniería Estructural Ltda.

規模:延床面積 9,650m²

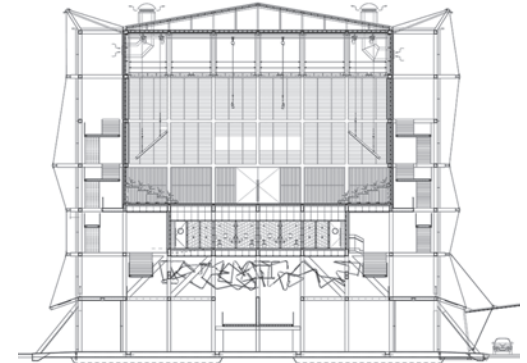
スケジュール:設計 2011年/竣工 2017

所在地:Concepción, Chile

参照:本誌pp.82-91



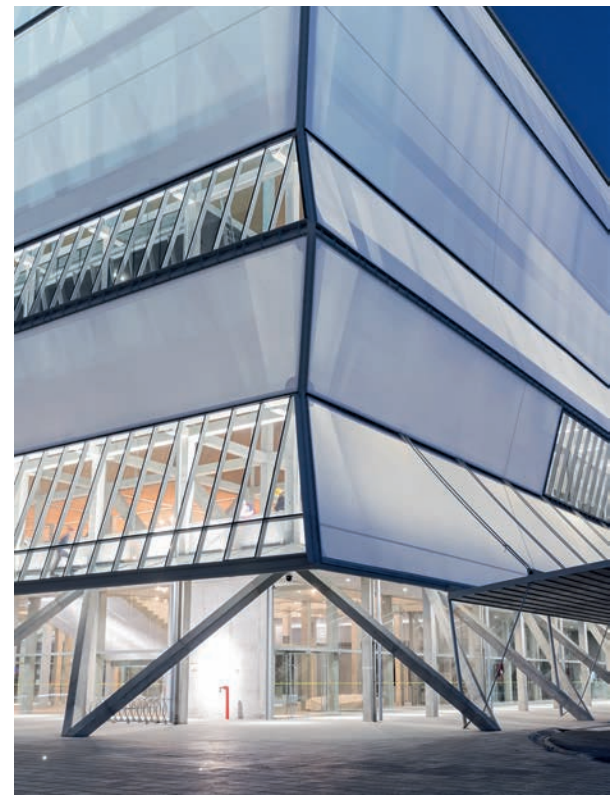
各階平面図



断面図



空からの全景



足元廻り



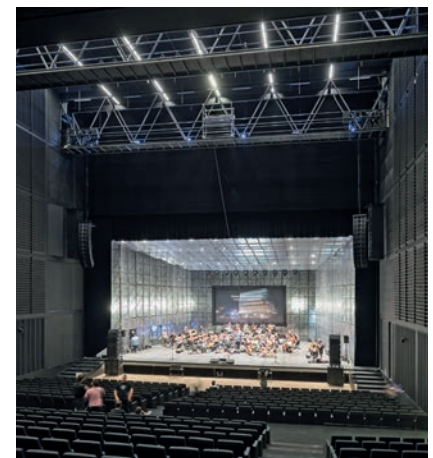
構造体を見上げる



構造体に挿入された螺旋階段



エントランス上部



室内楽ホール